
今日も平和だったり

逆叫

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

今日も平和だった

【Nコード】

N8507F

【作者名】

逆叫

【あらすじ】

今日も賑やかな二人組み。むしろ、うるさいくらいなんだが、今日、俺が奴らを見る目はいつもより少しばかり違っていた。

(前書き)

——むしゃくしゃしてやった。後悔はしていない。

休み時間。授業の節目となるこの時間、俺は珍しく独りで机についていた。

視線の先には、一組の男女。毎回、話し掛けるときは男が先だ。

あの二人は仲がいい。と、俺は思う。思っていた。女子の方に、あいつは気軽に話しかけられるからだ。

女子はやたらと突っ撥ねて、口調が荒い。気の強そうな切れ目の長い眼差しに白い頬、輪郭のはっきりした顔立ちに、無頓着なのか髪はでたらめに伸びている。

その性格ゆえん、周囲からは距離を置かれている。事実、俺も彼女に近寄ろうとも思わない。物怖じせずにニヤけてつつこんでいける、あいつはすごい。

あいつとは、ニヤけ面の似合う俺の親友だ。ぼさぼさの髪に、中肉中背の体躯。一旦聞くと、あっという間に引き込まれてしまうような声と口調。

その男子と女子は、俺が介入しないと、何かと話している。別に今では珍しい光景ではない。どうやって二人は打ち解けあったかは謎であるが、あの二人はそれなりに仲が良さそうだった。

だが、今日俺が彼らを見る目は少し違う。それを思うと、溜息を口端から漏れた。

だが、陰鬱であると同時に、少し楽しみにしている節もあるのは隠せぬ事実でもある。あいつらの会話はそれなりに趣があって聞いて飽きないのだ。

「なあ」

「なんだよ」

「お前、今幸せか？」

「ああ、幸せだよ」

「俺に誓って言えるか？」

「お前に誓いを捧げるなら、オレはカラスに祈りを捧げるね」

「酷い謂れ様だ」

「お互い様だ」

「本当に手ひどいね、君は。もつと素直になつたら可愛いのに」

「可愛いとか言うな。お前に褒められても、全部お世辞にしか聞こえない」

「んじゃ、ブサイクだなあ、本当に」

「早退したいのか」

「なんだよ。そうやって、俺を苛めて楽しいか」

「別に苛めてるわけじゃない。反応しているだけだ」

「はあ……」

「なんで幸せだっていえるんだ？」

「幸せだから、幸せなんだ。それ以外に何がある？」

「なんだそれ。いわゆる、頭痛が痛いとかと同じ類の言い訳じゃねえか」

「正にお前そのものだな」

「ヒドイッ！ ああ、どうせ俺は矛盾した存在ですよーだっ」

「言動と表情が一致してないからな。なんで笑顔で上のセリフが言える」

「俺の特技だ」

「文体で現しても、初見で看破できる特技を身に付けろ」

「ぶー」

「んじゃさ。万が一、俺とお前が結婚したとする」

「死ね」

「幸せか？」

「朽ちろ」

「そうだな。家は一般的な団地だ」

「堕ちろ」

「2LDKだぞ」

「昇天しろ」

「子供は二人欲しいな」

「——死ね」

「お、ボギヤブラリーが尽きたね。カワイいなあ」

「宇宙の果てまで飛んでいけ、大馬鹿野郎」

「よし、あと一時間耐えれば昼休みだ」

「——なんだよお前。しつこいんだよ。どっかいけ」

「何を言ってる。人間の三大欲求のうちの二つの欲求が同時に満たされる、至福の時間だぞッ!？」

「そんじゃ一生欲を貪って生きてろ。オレを巻き込むな」

「冷たいな」

「お前も冷たくなるか？」

「いいえ、結構です、ハイ、辞退させて頂きます、ハイ皆様ごきげんようゝまた来週ゝ」

「んじゃ、来週までオレの目の前に現れるな」

「その要請を受諾するのは意に反する」

「——ど、どっかいけ!」

「ちょっと難しかったかなあ？」

「黙れ黙れッ! うるさい!」

「まあ、俺も映画から勝手にパクって使わせてもらってるだけだから、意味は良く分からないんだよねえ。ということは、俺とお前は同レベルあぎゃあああああ! た、タマ蹴りは反則だッ!」

「蠅が止まってたんだ」

「うわあああ、セクハラモスquitoおおお!」

「モスquitoは蚊じゃねえのか？」

「ひ、引ッ掛かったなッ!」

「……はあ？」

「はははは……あ、もしかして、嵌められたこと分かってない？」

「……」

「ああああああッ！ 違うッ！ 間違ってる！ ゴメンナサイー！ いあああ……」

「ったく。誰もお前のタマなんか蹴らねえっつの」

「あ、うが……は、腹も同じじゃねえか……」

「あー、次が終われば昼休みだなー」

「うぐぐあああああ……今朝喰ったハンバーグカレーがああああ」

「何、朝からんな重いもの喰ってた……ていうか、まだ消化できてなかったのか、お前は……」

「ひ、昼休みだ……」

「一時間トイレお勤めご苦労」

「く、口から出しちまったじゃねえか……」

「良かったじゃねえか。また口から入るぞ」

「う、うるさい……」

「……」

「……」

「……」

「……」

「……」

「なあ……」

「なんだよ」

「どうした？」

「どうしたって、何だよ。もっと具体的に言ってくれないと、困る」

「怒ってるのか？」

「何をだ」

「お前の大切に育ててきた腹筋に、蹴りを入れたことだよ」

「いや、腹筋はどうでもいいが、ハンバーグカレーが惜しい」

「――」

「はぁ……ハンバーグは但馬牛だったのになぁ……」

「牛……？」

「カレーはレトルトだったのになぁ……」

「……」

「はぁ、お陰で昼飯はタコ飯だ」

「……」

「天井が綺麗だなぁ……」

「……」

「ほら、あの時計の長針。欠伸してるぜ」

「……悪かったって」

「何が？」

「何が、じゃねえ。腹……蹴ったの……」

「良いんだって、気にすんな」

「嘘つけ！ あからさまに気にしてるじゃねえかつ！」

「俺はお前が気にしていることを気にする」

「オレを苛めてそんなに楽しいかッ！」

「お、同じセリフ。おそろだおそろ」

「……ごめん」

「ほら言えた。全く、それだけでいいのに、虚勢張っちゃって」

「……それだけか？」

「それだけ……じゃない。もちろん」

「いえ」

「俺はお前のことが好きだ」

「……マジで言ってるのか？」

「大マジだ」

「この衆人環視の中か？」

だが、そんな光景を見ていて、俺は思ったね。あの女子にも、それなりに良い部分はあるとな。あいつがああのセリフを述べたとき、顔が真っ赤だった。どんなにつっぱてても、基盤までは偽れないんだ。それが恥ずかしいから、あんな入ったことを言うんだな。その羞恥が偉大なのは、俺には分からないがな。

そんな女子の本質を見抜いた、あいつもあいつだ。人の理性をくすぐるような言動をしてばかりの奴だと思っていたが、人間観察眼が卓越しているから、ああいう皮肉を羅列できるんだな。もっと有効活用してほしいが。

人間を二、三日観察しただけで、すべてを決め付けるのは愚鈍だ。その先入観や偏見に、どれだけの人間が苦しんでるんだろうか。俺には想像もつかない。

だが、あの女子も、あんな大声であいつと会話して本性を晒してたんだ。周囲に溶け込むのも時間の問題だろう。中身は可愛い女の子だ。あいつも。

箸で消しゴムを喉まで拉致事件の加害者と被害者はトイレへと走っていった。あのあーんは壮絶だったな。あのあいつのむせた顔。それを見たあの女子の顔。

両方とも、輝いてたな。

（後書き）

前書きの通り、夜眠れなかったので暇つぶしに書きました。ええ、その程度の作品なんで、マジになって見ないで下さいね。

最初は男二人だったんですが、なんか片方がそれっぽくなっちゃったんで、こっちのほうがいいか、ということとで訂正。結果、こういう結果になりました。ん、重複してるけど気にしない。

まー、こういうこともあると思って、明日を楽しんでください。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8507f/>

今日も平和だったり

2010年10月8日14時42分発行